



# 第41回全国高等学校軟式野球選手権大会 出 場 報 告

## 秋 田 県 立 能 代 高 等 学 校

明石公園球場中央入口前で能代高校軟式野球チーム



お礼のことば

全国軟式野球出場派遣委員会  
委員長 神馬恒成

能代高等学校軟式野球部の第四十一回全国高等学校軟式野球選手権大会出場に際しましては、各市町村や多くの企業、県内外の多数の方々をはじめ、PTA、同窓生各位から物心両面にわたりご支援を賜り、心より御礼申し上げます。まことにありがとうございました。

皆様からお寄せいただきましたご寄付の総額は、おかげさまをもちまして予想をはるかに超え、約三千七百名の方々から一千四百万円に上りました。決算書でご報告の通り大切に使用させていただきました。余剰金は次期軟式野球部全国大会派遣基金として管理していくことといたしましたのでご理解賜りますようお願いいたします。

昭和四十九年の全国大会初出場以来、今回で十二回目の出場を果たしました。その間、昭和五十七年の全国制覇をはじめ準優勝は昨年を含め三度を数えます。この輝かしい戦歴もひとえに関係各位のお力によるところ大であることを承知し、深く感謝申し上げますところでありませう。

さて今年度は、昨年準優勝に甘んじた悲涙を払うべく部員一同大いに奮い立ち私どもも渾身応援支援に意を尽くしましたが、時利あらず、無念ながら一回戦で敗れてしまいました。しかしながら松陵健児の名に恥じぬ健闘ぶりには沢山のお褒めの言葉をいただきたいしております。関係者としてうれしく存じております。

今後とも能代高校部活動発展のためお力添え賜りますようお願い申し上げます。ご報告がたが御礼とさせていただきます。



ごあいさつ

校長  
秋元正英

第四十一回、全国高等学校軟式野球選手権大会出場にあたり、能代市、山本郡の各町村をはじめ、各職場、PTA、同窓会、地域の方々等から、物心両面にわたって絶大なるご支援、ご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

今回は昨年に引き続きの出場で、各紙に「能代、頂点目指す気迫」、「全国二位返上へ、勝ちパターンガッチリ」、「全力で目標(優勝)達成へ」などの見出しが掲載され、私どもも大いに期待しておりました。しかし、初戦が開幕試合、しかも地元兵庫県の代表校との対戦ということもあって、緊張感が大きな重圧となつて、本校の機動力野球が出来ずに敗退してしまいました。過去二回の全国優勝の飾磨工業高校に、最後の最後まで奮闘した本校チーム、本場に立派でした。

「宣誓、我々選手一同は、軟式球児の汗と涙のしみ込んだ、このあこがれの明石球場で、この夏を締めくくるのにふさわしい、熱く、ひたむきなプレーをすることを誓います。」と、本校主将、周防慎太郎君のはっきりとした、さわやかな声が明石球場に響きわたり、それはすばらしい開会式でありました。

平成十九年、秋田県で国体が行われ、能代市では高等学校軟式野球の開催が決定されており、期待しての「能代開催」だと認識しております。

今後とも能代高等学校軟式野球部に旧に倍するご声援を賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

# 大会報告

## 全国高等学校軟式野球選手権大会

とき 平成八年八月二十五日～二十九日  
ところ 兵庫県明石公園球場

部	部長	監督	主将	マネージャー	投手	捕手	一塁	二塁	三塁	遊撃	左翼	中堅	右翼	補捕	補捕	補捕	補捕	補捕	
銭谷雅昭	飯坂尚登	周防慎太郎	鈴木美穂	佐藤太亮	工藤長士	高田功規	安田真一郎	山崎祐哉	山崎慎太郎	周防慎太郎	鎌田泰禎	門間裕一	笠井晃郁	佐藤大輔	三浦憲也	佐藤久範	加藤久範	安藤健太郎	佐藤豊



### 初戦、無念の敗退

▽第一回戦

能代	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
飾磨工	1	0	1	0	0	0	0	0	1	x	3	2							

第四十一回全国軟式野球大会に、奥羽代表として二年連続の出場を果たした本校は、昨年の全国準優勝の実績を更に前進さすべく勇躍試合に臨みましたが、初戦で思わぬ敗退を喫する結果となってしまいました。相手チームは地元兵庫代表の飾磨（しま）工業高校。

二時間三分、終始一点を争う投手戦となりましたが、開幕試合の独特な雰囲気にな

### 全国大会を終えて

部長 銭谷雅昭

昨年の全国大会準優勝は大きな財産になりました。自分たちにも全国大会で十分に戦える力があること、オフシーズンにトレーニングをしっかりやっていれば必ず良い成果が得られることを実感し、全国優勝という明確な目標をもって練習に励んできました。



秋季県大会は新チームになってわずか二週間ということもあり、準優勝に終わってしまったものの、一冬越して新しいシーズンを迎える頃には体もひとまわり大きくなり、他を圧倒

まれたか流れがつかめぬままに初回に一点を先取されました。立ち上がりに出鼻をくじかれ、一時的にせよ攻撃、守りともに落ち着きをなくしてしまったことが、この試合の行くえを支配したといえそうです。

それでも、さすが本校。三回には一死から敵失と四球で好機をつかみ、進塁打で二死二・三塁。ここで三番周防が遊撃を襲う適時打を打ち、二者を迎え入れて逆転に成功するという場面もありました。しかしその裏には同点に追いつかれ、次

する実力を身につけていきました。奥羽大会に優勝し、全国大会出場が決まった頃には作新学院などとともに優勝候補の一角に挙げられるほどになっていました。

一回戦で対戦した兵庫県代表の飾磨工業高校は二度の全国優勝経験を持つ実力校で、投手の安定感や戦術の緻密さには目を見張るものがありました。開会式で周防主将が選手宣誓を行い、その直後の試合ということで、独特の雰囲気の中で試合ということもありましたが、全国大会で勝ち抜くことの難しさを改めて思い知らされました。この経験を生かして来年に向けてまた頑張っていきたいと思っています。

全国大会の出場にあたり物心両面にわたって支援して下さった多くの方々から感謝いたします。ありがとうございました。

の四回以降は、本校の佐藤投手、飾磨工の本條投手の投手戦となりました。佐藤投手は好投を続け、相手チームに決め手を与えないまま回が進みました。八回の表、本校にチャンスがありましたが生かされずに無得点に終わりました。逆にその裏、死球と失策などで飾磨工に好機を与えてしまい、決勝点を奪われたのでした。

スタンドには、応援団、吹奏楽部員そして選手の家族たちの他、大阪周辺在住の本校卒業生などが陣取り、地元代表チームの応援に負けない応援をくり広げましたが、思わぬ負けに、無念の思いをかみしめました。しかし選手の終始懸命な試合ぶりは、さわやかな印象を残してくれました。

## 暖かいご支援をありがとうございました

### 全国高校軟式野球選手権大会



### 古豪復活を目指して

監督 飯坂尚登

昨年選手たちが残した「全国準優勝」という成果の上に立って、今年の選手たちも先輩に負けないようにと、全国優勝を目標に昨年以上の厳しい冬のトレーニングをこなしてきました。

秋の新人戦では結果としては準優勝でしたが、内容的にはまだまだで、正直なところこのチームは奥羽大会を勝ちぬく



ことができるだろうかと思いましたが、部員一丸となって自分たちの課題克服のために努力し、二年連

### 周防主将が選手宣誓



大会初日の開会式の花ともいべき選手宣誓に、今年本校の主将周防慎太郎君が選ばれ、見事にやりとげました。

続の全国大会出場を果たしました。

二年連続出場は、奥羽地区では過去八年間どの学校もなかったことであり、全国大会でも代表十六校中わずかに四校でした。シーズンが始まってから全国大会一回戦まで、公式戦と練習試合を含めて二十八試合行い、二十四勝三敗一分という成績でした。この間、卒業生をはじめ本場にたくさんの方々からの御指導や応援をいただき、新人戦からはみちがえるチームに成長させていただくことができました。心から感謝いたしております。

全国の高校軟式野球チームが能代という名前を思い出した今、常に全国制覇を目指し、真摯な姿勢で練習に取り組むチームを部員といっしょに作り上げ、応援して下さい方々の期待に応えるよう努力したいと考えています。

### 選手宣誓

宣誓

我々選手一同は、軟式球児の汗と涙のしみ込んだこのあこがれの明石球場で、この夏をしめくくるにふさわしい、熱く、ひたむきなプレーをすることを誓います。

### 選手生活をふり返って

主将 周防慎太郎

抽選の一週間前から「選手宣誓だったらどうする？」などとみんなで冗談を言っていたら本当になってしまった。本当にいやだった。もうどうしていいかわからなかった。でもやるからには最高の選手宣誓にしようと思った。本番では緊張して途中で止まってしまうのではないかと心配していたが、平常心で、全く緊張しなかった。ただ、もう一生浴びることのないだろう多くのカメラのフラッシュのまぶしさに驚いた。

今年の明石は暑いと聞いていたので夏休み中はグラウンドコートを着て練習をした。だが実際に空港を出たとき、びっくりするほどの涼しさだった。むしろ秋田のほうが暑いくらいだった。

春からプレッシャーの中で勝ち進んできたが、これほどのプレッシャーの中で戦った試合は初めてだった。チームの調子の悪さ、周囲の期待、開幕戦しかも相手は地元校。試合が中盤にさしかかるまで全員浮き



### スタンドから見た明石大会

応援団長 成田正剛

燃えさかる太陽の下で行われた軟式全国大会。周防主将の堂々とした選手宣誓にも、今年こそあの思いが込められていたが、目に見えぬプレッシャーが最後まで選手たちを締めつけていたように見えた。本来の野球が出来ないまま、まさかの初戦敗退。勝って当たり前という思いが選手達の肩に重くのしかかり、それでもそのプレッシャーに打ち勝とうと必死で頑張っていた。そのひたむきなプレーに、我々応援団も心からなる拍手と声援を送ることができた。

足立っていた。逆転したときもやっと追いついたという感じだった。そしていつの間にか試合は終わっていた。去年は四度も歌った校歌が一度も歌えずに終わった。一年間チームをまとめてきたが、初めの頃はこのチームで全国大会に出場できるのかとても不安だった。去年以上の練習量、それにチーム一丸となった取り組み、そして何よりも全員野球でつかんだ全国大会への切符だった。結果は残念な結果に終わってしまったが、今まで頑張ってきたことが選手それぞれのいい思い出になると思う。

軟式野球部の明石大会出場、硬式野球の甲子園大会出場のたびに、大歓迎をしてお世話くださるのが、能代高校同窓会近畿支部の方々です。今年もお忙しいお仕事を繰り合わせて球場へ足を運び、ご家族や知人の方々とともに声援を送ってくださいました。

# 後輩の活躍に期待

近畿支部事務局長の堀松征記さんに、お話をうかがいました。

能代高校同窓会  
近畿支部事務局長 堀松 征記

同窓会近畿支部が出来たのは、軟式野球がきっかけでした。昭和五十四年、当時は藤井寺球場及びPL学園球場での大会でしたが、我が能代高校軟式野球部は須藤(兄)をエースに擁し良くチームがまとまり、準優勝という想像だに無かった結果を得ました。



以来、会場が明石球場・高砂球場に移り大変距離になりましたが応援を続けてきました。昭和五十七年の全国初優勝後も、硬式野球部も含めて全国大会出場のために、支部同窓会を兼ねて応援させていただいております。

在阪の卒業生として応援に駆け付けていた初代支部長嶋田豊彦氏(第七期・故人)、二代目支部長大越敬治氏(第八期・故人)、大久保吉雄氏(第十一期)、それに私(第二十七期)が中心になって急遽藤井寺駅前の会場探しに奔走、試合後選手一同を招待して簡単な夕食ではありましたが、準優勝の感動を分かち合ったのが、同窓会近畿支部発足の始まりでした。

三代目支部長富波良夫氏(第十八期)を中心に、現在では十数人の小さなグループですが年齢は年々若返っております。軟式野球部の活躍を在阪卒業生の心の支えとして、これからも家族ともども、応援を続けて行きたいと思っております。

最後になりましたが、軟式野球部は常に指導者に恵まれ、すばらしいチーム作りをされており、その点も我々の期待しているところではあります。現部長鎌谷先生、監督飯坂先生にも心からエールを送りたいと思います。また紙面を借りて、いつもご協力を戴いている近畿秋田県人会の皆様にも、厚く御礼を申し上げます。



## 校友時報

1996. 8. 25 新開部員子  
明石速報

# 無念 能代高校 初戦敗退

### 第41回 高等学校軟式野球選手権大会

## 初戦敗退

・一回戦第一日目第一試合

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
能代(秋田)	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
飾磨工(兵庫)	1	0	1	0	0	0	0	1	X	3

奥羽大会を大差で勝ち上がり、能代高校の全国大会第一試合の相手は兵庫県代表飾磨工業高校。能代の先攻では、また初回能代が三者凡退に終わったのに対し、飾磨工はノーアウトからのランナーを先制点に結びつけた二点リードされて迎えた三回、相手の送球ミスで迎えた三回、相手の送球ミスと化した後、サードのエラーで二人が返り逆転に成功した。しかし、ほとんどのミスはランナーの間で、ノーアウトランナー二塁の場合で、送球ミスから同点に追い付かれた。その後は試合前の予想通り投手戦となり、均衡状態が続いた。そして迎えた八回表、二アウトから二番安田が三塁打を打ち三塁アウトをつくらすが、その後が競走得点に終わった。試合が動いたのは八回裏、飾磨工が能代を逆転させた。一点を取り、これが決勝点となりました。

昨年準優勝のアレクシイが、たのか、実力を出し切れず、そのまま終わった残念な試合だった。

### 校長先生談

「開会式直後の試合という事で選手のみならず、緊張する選手も、あんなに緊張した試合を見たことがないです。選手も、あんなに緊張した試合を見たことがないです。」

### 佐藤太亮投手のお父さん談

「勝つための試合だった。緊張した試合だった。緊張した試合だった。緊張した試合だった。」

### 飯坂監督

「試合前、選手には普段どおりにやれと言ったが、やはりかなり緊張していたようでした。特に立ち上がりミスが出ました。特に立ち上がりミスが出ました。特に立ち上がりミスが出ました。」

佐藤 太亮選手(投手)  
「今日の負けは僕のせいです。もう少しみんなが明石球場で野球がしたかった。」

工藤 長士選手(捕手)  
「悔しい。まさか一回戦で負けるとは思っていなかった。悔しい。」

門間 裕一選手(中堅)  
「チームに貢献できなかったことが悔しい。来年はもっと上までいきたい。」

### 選手の声

飾磨工高校 駒田 忠成 主持  
「リラックスしていたので試合で自分たちの力を十分に発揮できなかったことが、今日の敗北の原因だと思います。今日の試合も能代高校の分まで頑張りたい。」

周防 慎太郎 主持(遊撃)  
「悔しい一言。自分たちの力はこんなものじゃなかったと思う。後輩には僕たちのように油断してほくない。」

### スタントから

相手は地元兵庫県代表、こちらは遠く離れた秋田県代表、確かに最後の生徒の数はむこうの方が上回っていました。しかし、試合は負けていなかったので、なぜか、能代高校の方が勝つという思いが、天下の不平の一つも言わず、試合の間、うざりとした態度で、松本監督を見送ることを許さなかった。明石まで応援に来てくれた父兄や、お母さん、全員が一つのプレーに「善い悪い、選手たちは共に戦っていた。もちろん試合後の悔しさも一緒だ。ただ、しかし、誰かが来てよかったです。思っています。最後まで連れてきてくれた選手に感謝している。」